

岩手県盛岡市乙部の小坂稲荷神社の鉄竜海碑に関する調査報告書

(2022年8月19日作成)

中村安宏:岩手大学人文社会科学部教授

鹿野朱里:八幡平市学習支援員(西根中学校勤務)

はじめに

2022年7月31日、中村と鹿野は、岩手県盛岡市乙部29地割50-1(4頁の地図参照)の小坂稲荷神社境内において、南岳寺(山形県鶴岡市)の「即身仏」鉄竜海の名が刻まれた出羽三山碑を発見し、調査を行った。岩手県においては初めての発見であり、鉄竜海の現盛岡市域における布教活動を裏付けるきわめて重要な石碑であると考え。これはその調査報告書である。

1、調査結果

(1)小坂稲荷神社と石碑群(写真)



(小坂稲荷神社)

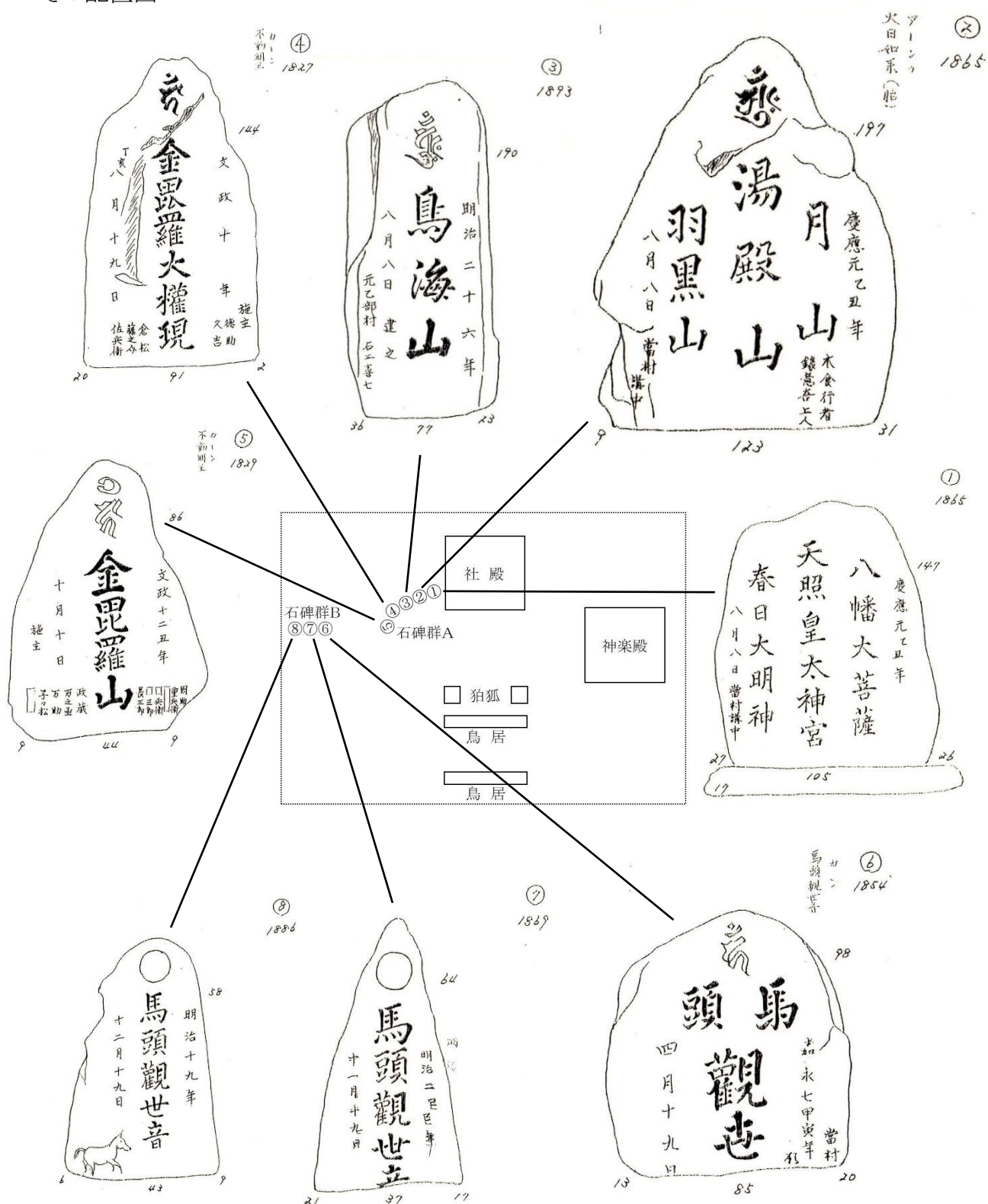


(石碑群B)



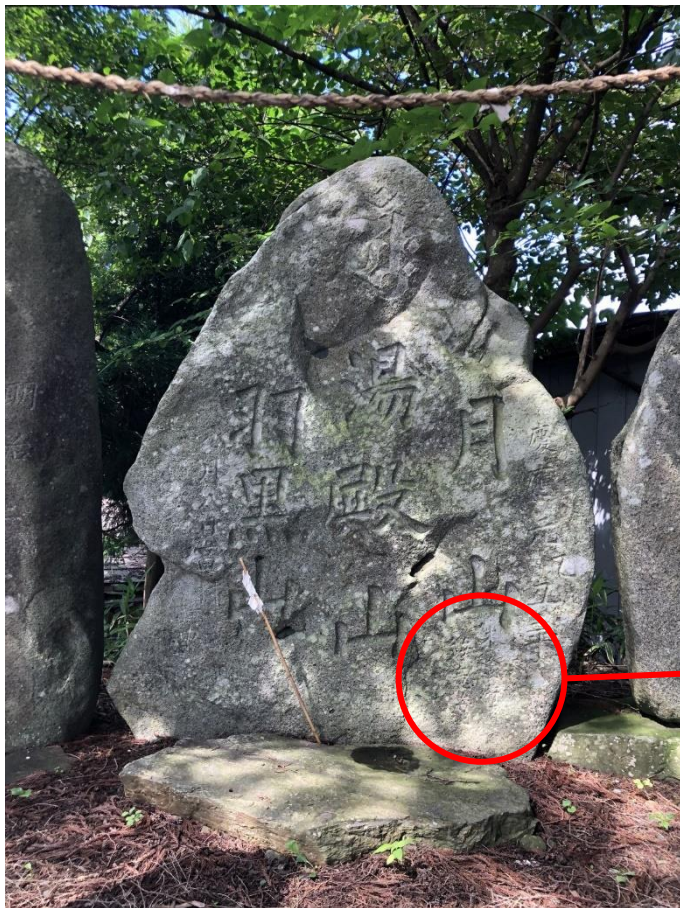
(石碑群A)

(2) 小坂稲荷神社の石碑図(臼澤正充『岩手の石碑』〈2004年、岩手県立図書館所蔵〉による)とその配置図



臼澤氏の図に関して、拓本を取ったところ、④の施主のうち「徳助」は「清助」、⑤の「施主」は「願主」の誤り、下の右から3番目は「重口」である。②の出羽三山碑については後述する。

(3) 出羽三山碑(鉄竜海碑) ②



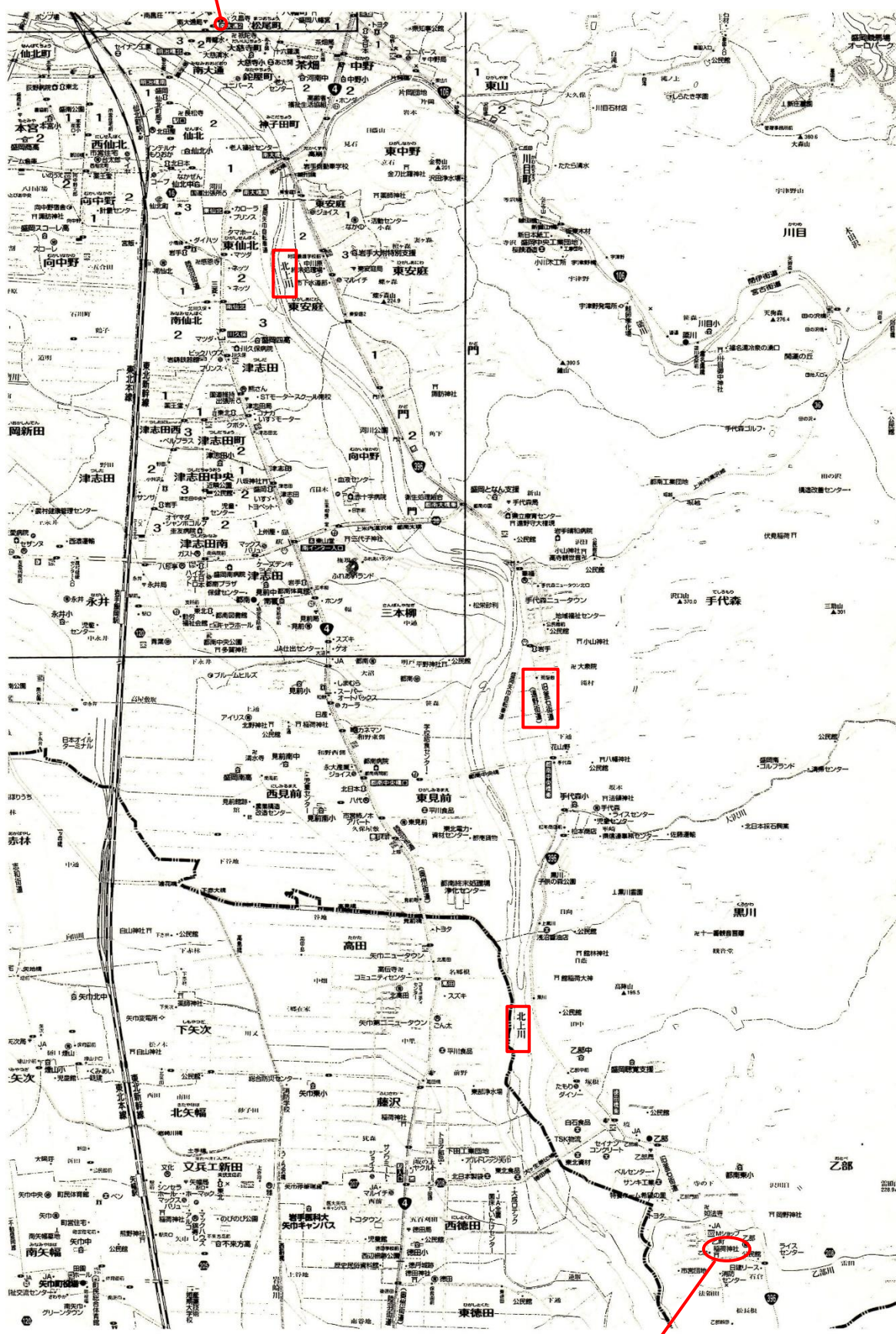
表面(背面に文字はない)

慶応元乙丑年
 月 山 木食行者／鉄竜海上人
 アーンク(胎蔵界大日如来) 湯 殿 山
 羽黒山
 八月八日 當村講中

慶応元年は1865年。「當村」とは乙部村のことである。臼澤氏のものでは「録?意吾?上人」となっていたが、拓本を取ったところ「木食行者／鉄竜海上人」と見える。①の三神碑と同日に建立されている。

2、地図（「都市地図 岩手県1 盛岡市 矢巾・紫波町 滝沢村」昭文社、2011年による）

湯殿山連正寺



小坂稻荷神社

3、考察

(1) 鉄竜海について

大瀬欽哉監修『新編 庄内人名辞典』(1986年)の「鉄竜海」の項目によると、本姓名は進藤勇吉といい、秋田県仙北郡で生まれたという。鶴岡の南岳寺にある湯殿山碑には、文久2年(1862)8月8日付けで、「一千日山籠」を達成したことが刻まれている。明治4年(1871)には鉄門海の遺志を継いで加茂坂新道を開削した(詳しくは、高館山周辺の歴史と文化を知る会編刊『今、よみがえる加茂坂峠古道』2017年、参照)。同辞典によれば、明治14年(1881)に鶴岡で入寂したという。

そののち遺体は本山の注連寺に運ばれ、内臓を取り出されて、即身仏として南岳寺に祀られた。命日は、昭和31年(1956)に焼失した南岳寺(現鶴岡市砂田町)の跡地の墓地(同市三光町、旧白銀町)にある鉄竜海の墓碑(おそらく内臓を埋めたところであろう)の日付によるに、明治14年(1881)10月28日である。

以上、詳しくは、中村安宏・鹿野朱里「[鉄門海の思想—『亀鏡志』の分析を中心に—](#)」(『アルテス リベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要)』第110号、2022年)を参照されたい。
(以上、中村・鹿野)

(2) 鉄竜海碑の意義

小坂稻荷神社の慶応元年(1865)8月8日付けの出羽三山碑に刻まれた「鉄竜海上人」には、「木食行者」とある。南岳寺境内にある湯殿山碑には、文久2年(1862)8月8日付けで、鉄竜海が木食行を達成したことが刻まれており、そのことと符合する。その3年後の慶応元年には盛岡藩領にいて布教活動を行い、乙部村の講中を指導していたと考えられる。乙部は当時、釜石街道(遠野街道)の宿駅であり、また北上川にも近い交通上の要地であった(4頁の地図参照)。なお、小坂稻荷神社に文政10年(1827)の金毘羅大権現碑と、文政12年の金毘羅山碑があるのも、舟運安全の金毘羅信仰に関係していよう。そののち鶴岡に戻った鉄竜海は、明治4年(1871)に加茂坂新道の開削を行っている。

ところで、岩手県文書保存庫には、明治12年(1879)5月27日付けで、注連寺の教導職試補・進藤鉄竜海ら8名が岩手県令・島惟精に宛てた「説教所設立願」が所蔵されている(前記拙稿参照)。つまり彼は最低2回は盛岡に来ていたことになる。鶴岡での開削工事ののちに再び盛岡で布教活動を行い、信徒が増加していくなかで、信徒たちからの要望に応じて明治12年の説教所の設立願に至ったと考える。

ここで前記拙稿では紹介にとどまっていた設立願について検討したい。

第1に、設立場所となっている「南岩手郡東中埜村廿三地割三百七十九番地」とは現在のどこを指すかということである。『角川日本地名大辞典3 岩手県』(角川書店、1985年)によると、「明治4年江戸期の盛岡城下の寺院街である寺の下、および鉾屋町・川原町・新穀町・穀町・呉服町・十三日町・川原小路・鷹匠小路・六日町・上衆小路・馬町・馬場小路・大清水小路・上小路と肴町の一部を編入」したということである(645頁)。岩手県立図書館には明治4年と明治6年の東中野村の絵図11枚(「岩手郡東中野村絵図面 明治四辛未年春」「岩手郡東中野村い印地割小絵図 明治四年辛未三月」「岩手郡東中野村は印地割小絵図 明治四年辛未三月」(2枚)「岩手郡東中野村に印地割小絵図 明治四年辛未三月」「岩手郡東中野村は印地割小絵図 明治四年辛未三月」「岩手郡東中野村へ印地割小絵図 明治四年辛未三月」「盛岡杉土手附近略図」「岩手郡東中野村絵図面 明治六年」「明治六年岩手郡東中野村絵図」「岩手県管轄陸中国岩手郡東中野村絵図」)が残されており、これを見ると、たしかに辞典の記述と一致する。ただしこのとき、地割は一から順に「い」「ろ」「は」を割り当てており、二十三は「む」に相当するが、その場所が記されていない(地割別の地図「む」も残されていない)ために、場所を特定することはできなかった。

ところで、『ブルーマップ 盛岡市1[南部]—住居表示地番対照住宅地図—』(ゼンリン、2019年3月版)によると、現在の湯殿山連正寺(盛岡市南大通2丁目、4頁の地図参照)の

地番は「379-1」であり、設立願と一致する。そこで盛岡地方法務局で土地台帳の写しを取得したところ、以下の内容が記されていた。

地割: 二十三
字: 新穀町
地番: 三百七十九番ノ一

所有・質取 主氏名のところを見ると、はじめに「連正寺信徒惣代 吉田市十郎」とあり、「登記年月日: 大正五年六月二八日」のところには「連正寺」、「登記年月日: 昭和三年三月十日」の「所有・質取 主住所: 新穀町三七九番地」のところにも「連正寺」とある。

連正寺はたしかに旧新穀町にあり、そして地割と地番(番地)も設立願と一致する。さらに「連正寺信徒惣代 吉田市十郎」は、設立願の信徒組頭の筆頭の氏名(後掲)と一致する。「南岩手郡東中埜村廿三地割三百七十九番地」とは、現在の連正寺の場所に間違いない。鉄竜海の設立願は現連正寺設立のためのものであった。

第2に、設立願の内容である。以下に掲げる。

今般当御県下於テ湯殿山大日如来信徒ノ者式千余名有之、右ノ者共ヨリ説教依頼ニ付、南岩手郡東中埜村廿三地割三百七十九番地買請候約定仕候、同地え説教出張処設立申度ク奉存候、尤右信徒ノ者共ニ於テ金三百円相募、向來永続目途相立候間、設立御許容被成下度、仍之信徒重立者連印以テ此段奉願候、以上

ここには信徒が二千余名に達し、信徒からの依頼に応じ、説教所を設立したい旨が記されている。連正寺は鉄門海が開山し、嘉永元年の焼失後に、鉄竜海が信者の協力のもとに再建したと紹介されているものもあるが(前記拙稿参照)、上記の内容からは再建ではなく、新設であると考え。山澤学氏は、江戸時代盛岡の城下町絵図・史料に連正寺(及び同じ湯殿山の山号をもつ金剛珠院)が見えないことから、明治12年～13年の創立に妥当性があることを述べている(「湯殿山木食行者鐵門海の活動形態－盛岡藩領を事例として－」『歴史人類』第43号、2015年)が、前記の明治初期の地図にも「連正寺」は見えないことから、山澤氏の指摘は当たっていよう。なお、明治12年10月にまとめられた『岩手県管轄地誌第一号之七』(岩手県編『岩手県管轄地誌 第一巻 岩手郡 I』東洋書院、2003年、所収)の「東中野村史」を見ると、「寺」の項目に「連正寺」は見えない。この段階ではまだ建設が終わっていなかった可能性が高い。

第3に、主だった信徒の住所である。以下に掲げる。

信徒組頭		
南岩手郡	東中野村二百五十六番地	吉田市十郎(印)
同 郡	仁王村油町九十四番地	柵山市五郎(印)
同 郡	東中野村十六番地	櫻田孫兵衛(印)
同 郡	仁王村本町八十番地	石山康太郎(印)
同 郡	同村八日町三十八番地	金田一命助(印)
同 郡	同村四ツ屋町四十五番地	山崎 周治(印)
同 郡	仙北町村百五十二番地	箭川清太郎(印)

このうち「油町」と「本町」は現在の本町通1丁目、「八日町」と「四ツ屋町」は本町通2丁目の一部であり、いずれも盛岡市街に当たる。上に名を連ねているのは信徒の一部であるが、明治12年の段階で、信徒たちは盛岡市街地にも多くいたことが推定される。

なお、連正寺は明治17年(1884)に焼失したといわれているが、『盛岡市史 第六分冊 明治期上』(1962年)にはそのときの状況が記されている(当分冊の編述者は田中喜多美)。同年11月4日に火災、盛岡市街河南地区をほとんど焼き尽くし、5日に鎮火したという。寺院は10か寺が焼失、また新穀町も類焼している。

連正寺は、乙部を通る釜石街道(遠野街道)の起点のすぐ近くに位置している(4頁の地図参照)。鉄竜海は、釜石街道および北上川沿いに布教活動を展開し、盛岡市街地に信徒が増えたところで連正寺の設立に至ったと考えられる。南岳寺の「即身仏」鉄竜海は、幕末期から明治期に、小坂稲荷神社のある、現在の盛岡市の南部から中心部にかけての布教活動において重要な役割を果たしていた。

以上のことを明らかにするうえで、小坂稲荷神社の鉄竜海碑は重要な意義を有するものであった。(以上、中村)

＊参考論文:中村安宏・鹿野朱里「鉄門海の思想
—『亀鏡志』の分析を中心に—」(『アルテスリ
ベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要)』第
110号、2022年)に関するQRコード



謝辞

本報告書を作成するに当たり、佐々木章一さまを初めとする乙部の皆さま、岩手県立図書館の司書の方々には大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

岩手県盛岡市乙部の小坂稲荷神社の鉄竜海碑に関する調査報告書

作成 中村安宏・鹿野朱里

掲載 [中村安宏研究室ホームページ](#)

発行 2022年8月19日

URL <https://jinsha.iwate-u.ac.jp/~yasuhiro/tetsuryukai.pdf>

